

からの借物だとしても、斎田功太郎、佐藤礼介両氏の「内外植物誌」であつて、他書は *T. pratensis* L. をこの名で圖録している。行さつは箴上の通りであるから、*S. hispanica* L.=キバナノバラモンジン=キバナバラモンジン=キクゴボウ=イスバンバラモンジンで *Tragopogon pratensis* L. には更に証明のない限り、和名がないことになる。しかし適当な和名を撰ぶことは、なかなか困難であるから、バラモンギク位のところで、お茶をにごしたらどんなものか、恐るながら提唱する。それから *S. hispanica* がどこか國內に残存することがわかればもつつけの幸である。同好の士示教を吝むなかれ。

○キバナサバノヲの最初の採集とその分布 (建部恵潤)

K. TATEBE : On *Isopyrum pterigionocaudatum*.

キバナサバノヲ *Isopyrum pterigionocaudatum* Koidz. in Acta Phytotax. Geobot. 9: 72(1940) は但馬國朝來郡山口村田路産品を type として命名記載されたものであるが、本種の発見から発表に至る間の事情及び筆者の觀察を「新種キバナサバノヲに関する雜報」として兵庫縣博物学会々誌第 20 号 (1944) に但馬の自生地発見者川中菊市君と共同で記しておいた。

即ち筆者は昭和 12 年 4 月 3 日播磨宍粟郡船越山でたゞ一花を着けた本種を得て、小泉教授に考定を乞うたが決定を後日にゆづられ、その後 14 年 8 月田代善太郎先生は同山の採集会に於てアヅマシロカネサウと考定された。ところが 15 年 4 月 23 日川中菊市君は上記の場所で完全なる標本を得て京大に送つたことから田代先生は自生地を調査され、その標本によつて小泉博士が研究の結果新種と決定された。

この時筆者へ船越山の花の標本を送るよう命ぜられ、生品を送つたからこれも参考にされたのである。

筆者は最近西播の植物研究家の故大土宇市氏の遺著を探查中因らずも氏が明治 37 年 5 月 21 日筆者の採集地船越山で採集していることを知つた。氏の苦心の著述「中國植物圖説」第 3 冊第 7 図に画かれたものは明かに本種で、果実をつけた全形と 1 小葉片の墨画とが図示され、その記載説明は次の通りである。

毛茛科 *Isopyrum dicarpon* Miq. サバノヲ (図鑑を見るに之に当る) サバノヲ? 根部を要す (牧野氏考定) 35 年 5 月 21 日船越山に採集す。花去て果実あり、23 日行者山 全長 7 寸許 茎 3 角柱狀。根は黒く塊莖あり、莖葉は花梗下に対生す。葉片は 3 出、各小葉 1~4 分長の柄あり、披針狀楕円形にして缺刻鋸齒あり、2,3 分~1 寸余長、1,2 分~5 分幅あり。3 小葉の中頂葉は單にして柄は長し。側葉は分裂して 2,3 の短柄区分をなす。花梗は 2,3 個莖長 (註 頂か) に生じ苞を具す。実は 2 個水平に開張す。5 分 5 厘許り、種子は 6 個許あり、球狀にして平滑、カラシ粒よりやゝ少なり。

○按に矢田部氏日本植物篇 49 枚サバノヲは葉丸く之に似ず、次のシログネサウの葉

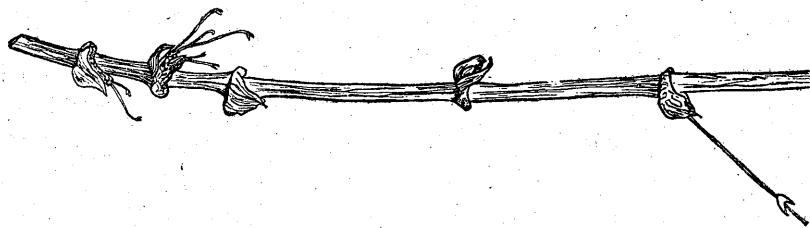
は卵状なれば比ならんか、塊茎や、此図に似ず。 サバノヲ *I. dicarpon* Miq. は作州那岐山にて雪吹氏の採集せしこと（植物学雑誌）1.81 号に見ゆれば是サバノヲの方が、山城國醜湖山にも産す（原文かたかな）。

これによつて明かなように牧野先生に標本を送つて考定を乞うたが、果実の標本であつたためサバノヲと疑問を残されており、氏も諸書の図と比較して決定に苦んだあとが見られる。しかし画かれた図と、船越山には本品以外に *Isopyrum* を産しないことによつて氏の採品がキバナサバノヲであつたことが明かである。

筆者は前記雑報中、本品の分布について播磨実栗郡船越山、神野村及び但馬朝來郡山口村に産することにより、東部中國山脈に分布することを予想しておいたが、氏はこの時の旅行に於て美作行着山で同一品を得ており、又那岐山のサバノヲも恐らく本種と思われる。そうすると本種の産地はさらに西へ延びることが予想される。

○川芎のふえかた（久内清孝）—K. HISAUCHI, The propagation of "Senkyū."

漢方のくすりとして名高いセンキウは、各地でよく栽培されて居るが、一般にはあまり知られていない。筆者の如きも其生態についてはよく知らない。もちろん普通の本にはかいてない。寺島良安の倭漢三歳圖會には「宿根生苗分枝横埋之別節々生根」と本草綱目の文を、そのまま轉録しているし、本草圖譜には簡単な記事もあるが、生態をよく知らぬため、その意味がよく汲みとれなかつた。ところで、最近佐々木一郎氏が富士山の栽培地で實見された材料を見て、はじめてこれが解つた、というのは、この多年草の地上莖は冬に枯乾するが、葉柄の殘存部に包まれた節は、ソロバン玉状にふくれて多肉になり、これが發芽し、節間部は枯れて細くなり、節のところ丈が残る。だから枝や莖



を地に横にしておけば、各節から芽を出してふえる。栽培者はこの方法で増産して居るのである。つまり節々生根する性質を利用しているのである。立つたまゝ冬枯れしたもので、上の方は枯れるようだが、地表に近い節は、たいてい發芽する。かゝる性質があるので、果實が成熟しないし、またその必要もないのであろう。學名については矢部吉禎氏は繖形科總説（1902）で、これが記相文をかき、*Conioselinum* sp. として處理されたが、のち牧野先生はこの矢部氏の記相をもととして、植物學雑誌 22 卷（1908）で、